

【要約】

本研究の目的は、葬儀などの式典場面において述べられる悔やみのことばである「弔辞」を談話資料として捉え、歴史社会言語学の立場から分析し、「弔辞」の全体像を明らかにすることである。本論文は全 7 章から構成される。

第 1 章 研究の枠組み

この章では、本研究における弔辞の定義を示す。また、葬送儀礼の近代化について述べ、弔辞が読まれる背景や目的について考察する。そして、本研究で扱う弔辞の範囲や収集方法、弔辞が残される理由や残された資料の性質について述べる。

第 2 章 弔辞の談話構造とコミュニケーションスタイル

この章では、先行研究を踏まえ、本研究における弔辞談話の分析方法について述べる。

まず、これまで文章や談話に用いられてきた、内容によって分類する「段（文段、話段）」という単位についての先行研究を踏まえ、本研究における「段」の分類方法について述べる。

次に、弔辞談話の発話意図の分類に K.ビューラーの 3 機能説（表出・訴え・演述）を用いてどのように弔辞の発話意図を分類するかを示す。以上のように、弔辞の談話分析では内容と発話意図に分けて分析を行う。

また、スピーチには次の 3 種類のコミュニケーションスタイルがあることを指摘する。一つ目は、政治演説のような「一対多のコミュニケーションスタイル」。二つ目は、岡本他（2008）が漫才などを例にして指摘する主役を直接的な受け手とし、参列者を傍参与者とする「オープンコミュニケーションスタイル」。三つ目は、「一対多のコミュニケーションスタイル」と「オープンコミュニケーションスタイル」が混在し、直接受け手を切り換える「切り換え型コミュニケーションスタイル」。そして、日本の弔辞の多くは三つ目の「切り換え型コミュニケーションスタイル」を用いることを指摘する。

第 3 章 弔辞談話の対照研究

この章では、(1) 話し手の立場ファクター (2) 故人の属性ファクター (3) 言語（文化）ファクターというファクターを設定し、第 2 章で述べた分析方法を用いて分析する。その結果、話し手の立場ファクターでは、公的立場か私的立場かによって談話展開や、発話意図が異なっている。また、故人の属性ファクターでは、職業や死因によって話される内容や、談話展開が異なるという点を指摘する。そして、1917 年の戦没者と 1974 年の研究者に対する弔辞の談話構造が似ており、日本語の弔辞の談話構造は時代に左右されないという点も指摘する。言語（文化）ファクターでは、中国語・韓国語・英語との比較を試みた。その結果、中国語・韓国語は基本的に日本語の弔辞と談話構造や内容は似ているが、英語の弔辞

は一对多のコミュニケーションスタイルをとっており、談話構造、内容、発話意図においても他とは大きく異なっていることを指摘する。以上のようにそれぞれのファクターにより、弔辞談話が異なることを明らかにした。

第4章 弔辞の文体変化

ここまでは、基本的に弔辞を共時的に分析してきたが、第4章からは言文一致による文体変化をキーワードに、通時的に分析する。そのため第4章では、弔辞談話における文体変化の時期について弔辞の文末辞を指標として分析する。その結果、弔辞では1950年代ごろに文語体から口語体へと変化しており、変化の過渡期には口語体を基調としながら慣用的なフレーズでのみ文語体形式を用いるという混同が見られた。また、弔辞の文体が変化する時期を他の資料と比較すると、新聞や雑誌より約20～30年ほど遅れることを指摘した。

第5章 人物説明文における「君」

この章では、人物説明において用いられる「君」は相手に呼びかける「呼称」としてではなく、話題の人物として述べる「言及称」として用いられていることを指摘し、明治から現在にかけての新聞・雑誌と弔辞を用いて、言及称の「君」を収集し、使用されている時期や用例数などの使用実態を明らかにした。そして、弔辞においては文体変化をキーワードに「君」の「言及称」の用法が「あなた」へと語を変えて引き継がれていることを明らかにした。

第6章 弔辞における靈魂語彙の使用

第5章では「君・あなた」という生きている人にも用いられる語彙をとりあげたが、第6章では「英霊」「御霊」「尊霊」など死者に用いられる語彙（「靈魂語彙」）の使用実態を明らかにする。また、その中でもある時期から急激に使用数が減少した「英霊」という語に注目し、減少した要因について考察する。その結果、弔辞談話における「英霊」は、終戦による戦没者の消失が原因ではなく、文体変化の影響により使用されなくなったことが分かった。

第7章 社会変動と英霊の使用

第6章では、弔辞における「英霊」の使用についてみたが、第7章では、新聞・雑誌など他の資料を用いながら、本来「すぐれた人。英華靈秀の気の鐘まつて生じた人」（『大漢和辞典 修訂版』）を意味する語がどのようにして「戦没者」の意味に限定されていくのかを分析する。その結果、日中戦争時の強烈なプレスキャンペーンの影響がみられた。また、このような社会変動が語彙や弔辞に与えた影響について考察する。

おわりに

本研究では式辞スピーチの一種である弔辞についてさまざまな手法や観点から考察した。

これまで弔辞を言語資料として分析してきたものがなかったが、本研究によりその性質や談話構造、弔辞の内容や発話意図などを決定する要因や、時代による語彙の変化などが明らかになった。

しかし、他言語の弔辞に関しては資料が少なく不足している部分も多く、日本語の弔辞に関しても本研究で共時的に分析したことを通時的に分析するなど、多くの課題が残される。また、弔辞だけでなく、スピーチ全般や語彙研究など他の研究とも関連付けながらさらなる発展に繋げたい。